昭和最後の日々

松本健一

昭和最後の日々

松本健一

昭和最後の日々

まつもとけんいち
松本健一

1946年　群馬県前橋市に生れる．
1968年　東京大学経済学部卒業．
　　一年間の企業勤務を経て，
1971年　『若き北一輝』を発表，注目を浴びる．以後現在に至るまで，文学・政治・社会等多方面にわたる文筆活動を展開．
近　著　『エンジェル・ヘアー』（文藝春秋社）

1989年7月15日　初版第1刷発行

著　者　松本　健一
発行者　小川　道明
株式会社　リブロポート
〒171　東京都豊島区南池袋2—23—2
　　池袋パークサイドビル
電　話　東京 03(983)6191　編集直通 03(983)1895

© K. Matsumoto 1989　Printed in Japan
装幀　加藤光太郎
編集協力　赤岩なほみ
編集担当　早山隆邦
印刷・誠和印刷　製本・大口製本
ISBN 4—8457-0414-5　C0095

昭和最後の日々　もくじ

I　日々のたたかい　7
II　思想の渦のほうへ　157
滅亡のカルタゴ伝説　159
ピエール・カルダンの鼻紙の函　166
知識人の現在　171
「あの」論争について　178
独立守備隊長の想い出　184
清水幾太郎さんを悼む　190
山本有三の『米百俵』と司馬遼太郎の『峠』　194

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

挫折せる昭和の精神　217
昭和という連続した時代——森崎湊と小沢開作の死の意味を問う
文化としての天皇政治　238
政治の彼方の虹　242
民族の記憶の底に　252
象徴天皇制の行方　260
ポスト・モダンから西田哲学へ——平成元年の逆説　278
〝危険〟ということ　290
あとがき　297

装幀　加藤光太郎

昭和最後の日々

I

日々(ひび)のたたかい

87／10／6

ローマ帝国の保守的政治家であった大カトーは、すべての演説の最後を「それにしても、カルタゴは滅ぼさるべきである」という言葉でしめくくった、といわれる。ローマには、ローマ帝国の健全な発展のためにもカルタゴを存続させるべきだ、というハト派の反対意見もあるにはあったが、結局は声が大きく、同じことを執拗に主張しつづけた大カトーの意見が通ったのである。

こういうと、大カトーはいかにも感情的で、非論理的だったようにおもえるが、必ずしもそうではない。カルタゴは貿易大国だが、海外からの食糧輸入の道が断たれる万一の場合にそなえて、国内の農業生産を強化していた。大カトーはそれを逆手にとって、元老院の議場にカルタゴ産の新鮮で大きなイチジクをもって現われ、ローマ農業にとってカルタゴがいかに脅威であるかを主張したのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

この、カルタゴ産イチジクを日本車や半導体に置き換えれば、大カトーの論法はそのままでアメリカの「ジャパン・バッシング（日本たたき）」になるというのが、昨今の経済大国、平和国家日本の危惧である。だが、ローマの将軍スキピオがカルタゴの廃墟に立って「いつかローマにも同じ日がくる」と憂えたように、ローマも結局は滅びた。それに、アメリカは「ジャパン・バッシング」に血道をあげているかにみえる一方で、強制収容所に入れられた第二次大戦中の日系米国人に二万ドルずつの補償をする法案を可決している。歴史は、同じようには繰り返さないのである。

＊本篇については、第Ⅱ部の「カルタゴの滅亡伝説」というエッセイを併読されたい。カルタゴ論は、わたしの『世界史のゲーム』を日本はどう超えるか」というテーマの重要な一つとなるはずである。

87／10／13

天皇制を批判する論理として、もっとも有効なものの一つが、『孟子』にある「民を貴しとなし、社稷之に次ぎ、君を軽しとなす」であろう。こんにち、民衆は「私」のために働き、政治家は「権力」を手に入れることに狂奔している。『孟子』の思想を純粋なかたちで体現しているのは、むしろ無私なる天皇かもしれない。これが、現代日本において幸福と不幸が背中合わせにある所以だろう。

天皇の手術に明け暮れた感がある一ヵ月だったが、その過程で、解せない思いにとらわれたことがある。宮内庁の会議で「玉体（ぎょくたい）（＝天皇の体）にキズをつけてはいけない」と、手術反対の意見がでたというのだ。もし、その意見が会議で通ったとしても、無私なる天皇は「あっ、そう」といって当然のように従ったであろう。この宮内庁内部の意

見は、むろん時代錯誤的な神聖天皇観にもとづいているのだが、それが天皇を国民から引き離す結果をもたらしたことについて、考えてみたことはないのだろうか。

天皇はいわば神輿（みこし）である。民族がかついでゆくままにかつがれる。戦前のファシズム体制下にあっては神聖天皇として、戦後の民主主義体制下にあっては象徴天皇として存在する。宮内庁はその天皇と国民の回路になっているどころか、むしろ回路の障害になっていることのほうが多い。いまは、天皇制批判の〝大説〟よりも、宮内庁の是非を論ずる〝小説〟が必要な時代なのではないか。

＊本篇の問題意識は、一年あまり後、「文化としての天皇政治」（第Ⅱ部所収）や「政治の彼方の虹」（同）などに引き継がれる。

87／10／20

北炭真谷地炭鉱が十月九日付で閉山した。創業以来八十二年の歴史に幕が下りたのである。昨年末の三菱石炭高島炭鉱、三井石炭砂川炭鉱と閉山がつづいて、これで国内主要炭鉱は八鉱を残すだけとなった。円高にともなう内外炭の格差は、コロンビア炭トン当たり八千円に対して、国内炭二万三千―四千円という状態であるから、閉山は仕方がなかったともいえる。

石炭が斜陽産業とよばれはじめたのは、高度成長の離陸期にあたる一九五〇年代末である。それ以来、炭鉱は閉山につぐ閉山、合理化につぐ合理化の道をたどってきた。その合理化のカジとりの中心になってきたのが〝首切り文平〟こと前日経連会長の大槻文平氏である。大槻氏はみずから、その〝首切り文平〟のアダナが、長く炭鉱の合理化に

関わってきたことに由来することを近著『私の三菱昭和史』で明かしている。

円高による合理化の対象は、石炭ばかりでなく、造船、鉄鋼……とつづいて、いずれは農業もそうなるだろう、炭鉱の閉山はそのモデルケースにすぎない、と大槻氏は別のところで語っていた。経済の国際化という事態を考えれば、当然そういう合理化は「必要」とされるにちがいない。しかし、今年一月に高島炭鉱労組の山崎清嗣書記長が自殺し、八月には真谷地炭鉱「退職者の会」の加藤正事務局長も自殺している。かれらの死も経済の国際化のために「必要」であったのだろうか。そういう想像力がいま、経済界には、いや日本国民には欠如してきているのではないか。

87／10／27

この夏、九州にでかけた。たまたま仕事の関係で、大分県玖珠郡の宝泉寺温泉というのと、宮崎県えびの市の京町温泉というのに泊まることになった。その両方の土地に、フィリピン女性がいた。前者では、旅館の接客係、後者では、歓楽街の通りで客待ちをしているスナックのホステスだった。昔風にいえば、いずれも酌婦ということになろう。

秋になって、新潟県の佐渡ケ島にでかけた。西の端の相川町で十数年ぶりに訪ねる家を見失なったので、人通りがとだえ森閑とした通りの脇の家のなかにいた若い女性に道をきいた。たどたどしい日本語で、「わかりません」という答えがかえってきた。あとで地元のひとにきくと、ストリップ劇場の踊り子で、夏の観光シーズンが終わるとバー勤めをしている、ということだった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton